

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	大橋 さつき【論文博士】	要 旨
論文題目	発達障がい児を育む「創造的身体表現遊び」の実証的研究	<p>本研究では、ムーブメント教育と身体表現活動を基盤に展開してきた筆者独自の実践を「創造的身体表現遊び」と名づけ、その特徴からねらいや構造を明らかにし、発達障がい児支援における「創造的身体表現遊び」の理念や意義について論じることを目的としている。</p> <p>これまでに筆者が実践してきた 60 のプログラムの記録を対象に分析を行い、その特徴を明らかにした結果、発達障がい児支援における「創造的身体表現遊び」の可能性として、3つの仮説を導き出した。①他者との位置関係や集団における空間利用が多様にアレンジされていることにより、空間把握能力の向上を促し、さらに、高度な運動遂行能力の獲得に関係している、②集団で活動する場面や他者とのやりとりを促す活動が多く、発達障がい児のコミュニケーション能力の向上に機能している、③発達障がい児の喜びや満足感、達成感、意欲の向上を支える要素が強く、自尊感情の低下を防ぐ効果がある。これら3つの仮説を検証するために、第3章では、298名の運動検査のデータを統計処理し、発達障がい児の空間関係把握能力が高度な運動遂行能力の獲得に強く関係していることを明らかにした。第4章では、自閉症スペクトラム児（ASD児）4名の他者との相互作用に関する分析を通して、コミュニケーション支援における「創造的身体表現遊び」の特徴と方法を明らかにした。第5章では、ASD児の自尊感情傾向の変化を調査し、その評定において自尊感情傾向が高いと判断された活動場面の分析を行い、「創造的身体表現遊び」の継続的参加によって、対象児の自尊感情傾向が向上する可能性が示唆された。</p> <p>それらの結果を受けて、「創造的身体表現遊び」の環境は、発達障がい児の「動きたい」「かかわりたい」という欲求を促し、彼らは、環境（他者や遊具）との対話の中で主体的に動き、身体運動能力、コミュニケーション能力、自尊感情を高めていることが示唆された。すなわち、「創造的身体表現遊び」は、標準的な発達から想定される課題を特化しマイナスを埋めようとする対処療法的な訓練法ではなく、発達障がい児の主体的な育ちを支える漸次的で循環的な展開を有していると結論づけた。</p>
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	教授 内藤 俊史	
	准教授 水村 真由美	
	教授 新名 謙二	
	教授 浜口 順子	